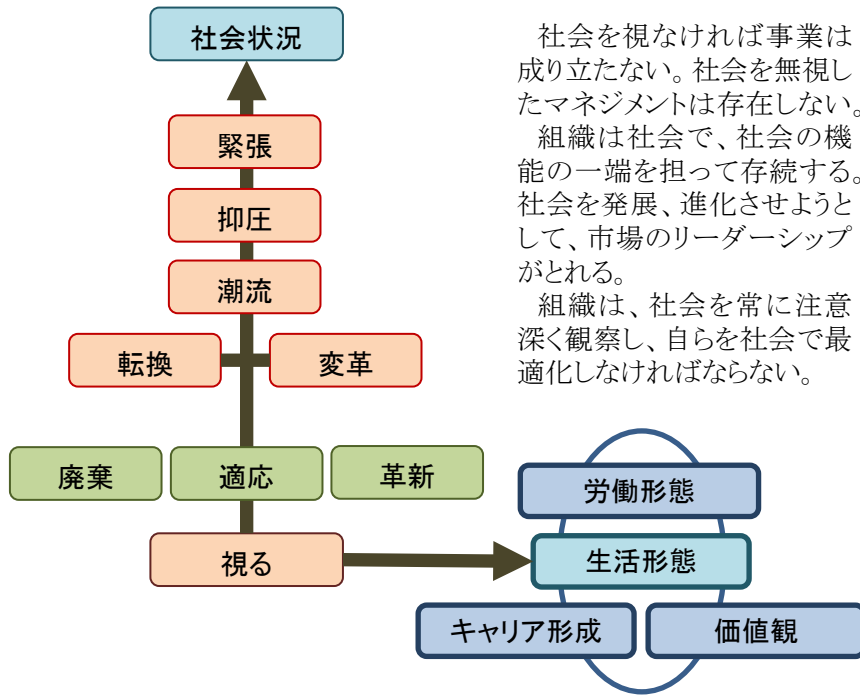


社会を見る



社会を視なければ事業は成り立たない。社会を無視したマネジメントは存在しない。組織は社会で、社会の機能の一端を担って存続する。社会を発展、進化させようとして、市場のリーダーシップがとれる。組織は、社会を常に注意深く観察し、自らを社会で最適化しなければならない。

社会を見る。

人は見たいところを見る。意識している、いないに関わらず気づいたところを見る。長年、見ていたとしても「社会とは何か」「今の社会はどうなっているか」と問われて、直ぐに答えられない。現在発生している社会の問題や課題は答えられる。その解が適切かは分からない。少なくとも、自らの解と、自らの仕事を組み合わせて、現在の仕事をしているのは間違いない。もし、社会とは関わりなく、仕事をしているとすれば、自らの姿を社会に映しだすのは無理だろう。社会に自分と類似した姿を見出すのも困難となる。仕事の成果は不確かなものとなる。

社会学の本を取り出してみれば、社会の構造、制度へと進む。正統性を説明する。仕事としてとらえたとき、これらも大切な要因であるが、機会発見にはつながりにくい。

社会を常に見なければならない。そして、問わなければならない。自らの仕事が、社会で機能しているか、社会の問題を解決しようとしているかを問う。

社会は不可解である。社会では、人に関わるすべての問題を取り扱う。生活、教育、医療、芸能、経済、産業、政治、労働、等々。その地域の文化、慣習に基づいて秩序が保たれているはずである。

社会は進歩する。すべての人々が豊かになろうとして活動している。社会は、自由、平等、平和を望み、築こうとする。社会の進歩と人々の願望の中で、問題が起こる。

その問題を解決しようとして、企業があり、公益法人、社会事業がある。多様に組織体、機能がバランスを保とうとして、問題が起こっている。

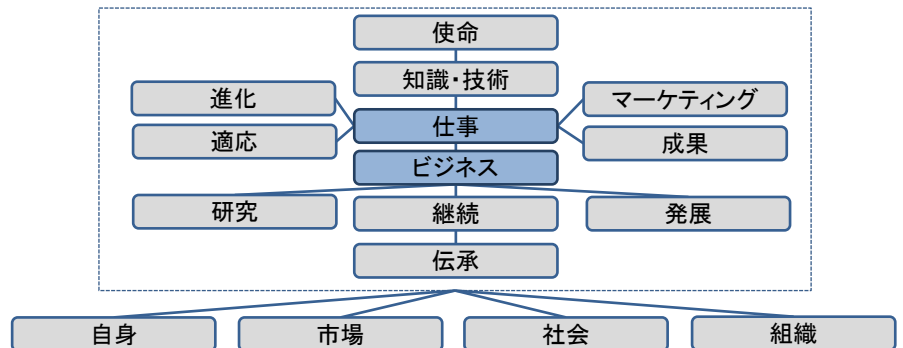
社会を見る手がかりは、緊張、抑圧、潮流、転換、変革である。社会のどこかの分野で、緊張、抑圧、潮流、転換、変革のどれかが起こっている。あらゆる分野で、この5つのどれかが存在する。この発見が機会に繋がるのだ。社会を言い表すことも可能になる。

企業人はニーズを探す。この行為は、自社商品に対しての場合が多い。そうではない。社会そのもののニーズを探す。ニーズが発生する所に、緊張、抑圧、潮流、転換、変革が存在しているのだ。

もう一つ、個々の生活形態を観察する。生活形態が集まって、社会が構成される。生活形態の変化、様式に着目する。生活形態を中心とした価値観、意識、労働を見る。

5つ視点と生活形態を合わせて観察すれば、大きな見落としはない。

「仕事とはなにか」を丁寧に考えておきたい。学校は教師のためにあるのではない。病院は医師のためにあるのではない。科学は科学のためにあるのではない。組織は、その組織に勤める人のためにあるのではない。「仕事とは」説明しようとすると、以下の単語群が最低量として必要になる。単語を結んでいる線は、単語との関わりを表している。



《思考単語整理集》より